

史遊サロン通信

No 260号
平成29年
9月5日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

『二宮金次郎の一生』が映画化される

三戸岡道夫氏の名著『二宮金次郎の一生』を原案とした映画『地上の星 二宮金次郎伝』がいよいよ制作されることになり、その記者発表会が八月四日、生家のある小田原市の尊徳記念館で行われた。

監督は『長州ファイブ』『地雷を踏んだらサヨウナラ』『十字架』の作品を手がけた五十嵐匠、脚本は映画『武士の家計簿』の柏田道夫、キャスト陣には、二宮金次郎(尊徳)に秦野市出身の合田雅吏、大久保忠真(小田原藩主)に、映画『半次郎』の榎木孝明。有名人の「二宮金次郎」のことなので、しばしば映画化されていたかと思うとそうでもないらしい。調べてみると一九五七年の「二宮尊徳の少年時代」と一九九八年の「二宮金次郎物語・愛と情熱のかぎり」があるが、いずれも金次郎の少年時代が対象である。「二宮金次郎の一生」を描こうとすると、定番の

ストーリーとなってしまう、「エンターテイメント性に欠ける」らしい。したがって、二宮金次郎の生涯を描く映画は、今回が初めてで、そのため、今回の映画化も構想から三年かかったとのこと。

ただし、今度の『二宮金次郎の一生』は、少年期の作品と異なり、「道徳なき経済は罪悪であり 経済なき道徳は寝言である」の言葉のように経済小説としても楽しめる展開をしているので期待できよう。

映画の完成は来年の秋になるとのことであるが、製作準備委員会事務局では「あなたもサポートして映画づくりに参加しませんか」と一口一百万円の基金募集を行っている(問合せ先 〇三六四五五 五八五〇 児玉氏)。

今月の史遊サロンは予定通り第三土曜日の九月十六日です。会場は定例の銀座ルノアール八重洲北口会議室。なお、十一月の史遊サロンも予定通り第三土曜日の十一月十八日です。「自由執筆」については、随時お寄せ下さい。「埋め草」も大歓迎。

史遊サロンの性格は、基本的には参加者の懇談会としていので、世話人としてあまり事前にテーマや話題を準備する努力はしていません。しかし、そのために散漫になったり、あまり淋しい会になってしまっても、参加して下さる方に申し訳ない。

実は、史遊サロンの世話人を引き受けることに決めた時には、もし話題が不足する様なら、私ひとりでも、毎回ミニ講演会をするつもりであった。今までに、色々な会で講演した回数は数十回にはなるので、その中から、適宜、選んで講演をするなら、十回程度なら問題ない。主とした話題は、韓国関係、考古学関係、計量史関係、金属史関係である。

外部に声を掛ければ、多少、人集めできる内容であるが、今のところ全くその考えはない。ぼつぼつ始めようかと思っている。

(新井宏)

出雲大社再考 (一四)

近世最大危機佐太神社紛争 (6)

松江藩の殿罰

村上 邦治

幕府寺社奉行は、両出雲国造である七〇代千家直治と六七代北嶋兼孝を闕職させた。千家家では嗣子はおらず、千家上官の宗敏(直治の従弟)を七一代に襲職させ、北島家では弟道孝を継がせることで、国造継承と祭祀を守ったのである。

しかしこれで終わりとはならなかった。松江藩からは、次々に処罰が発せられた。

まず同月藩寺社奉行から家老の仰せとして、「両国造の神器家財等封印上官に預けること、社人は杵築の外に出ることを遠慮すること、両国造の縁者には罷免等処罰があること」が、言い渡された。合わせ祭祀については、「神火消絶なき様、別火・上官協力して毎日神勤すること」を、命じたのであった。

翌月には家老三人の連名で、「国主の仰せを軽んじ承引しなかつた事、言語道断である。国造を補佐する立場の上官二人は、寺社奉行に逆らつて、国造に邪義を進め、和談をさせず。就中長谷正之、佐草直清の科重し、両名閉門をおおせつく」とし、さらに「その

他の者も働きに応じ、軽重の御沙汰がある」と通知したのである。

千家家上官長谷正之は千家村に、北島家上官佐草直清は北島村に、各々蟄居(閉門から一等減刑)した。二人は国造を守るため、罪を一身に背負い、仰せに従つたのであった。

松江藩の罪状が解除されたのは、藩主交代の宝永元年(一七〇四)で、服した期間は七年間に及んだ。そして直ぐに、四〇年後の延享元年(一七四四)の正殿遷宮造営にむけて、大社挙げての準備に取り掛かることになった。

佐太神社を訪れたのは、一〇月初めの三時過ぎであった。神名火山とされる秀麗朝日山(標高三四二^ミ)の東麓に有り、日が暮れるのは早い。丁度本殿の屋根が修理中で、網に覆われていた。しかし文化四年(一八〇七)松江藩により造営された、古色蒼然とした三層の大社造り本殿が認められた。

本殿の正中殿には佐太大神(明治維新政府の指示により、猿田彦神と同一とされた)、イザナギ、イザナミ等を祀り、北殿には、天照大神、瓊瓊杵尊を、南殿にはスサノウ等を祀っている。出雲大社をはるかに勝る多くの神々を祭神としたところに、常に大社と張り合ってきた当社の意地があらわれている。

一〇月出雲国では神在月と称し、出雲大社「神在祭」が知られる。陰暦の一〇月一〇日の夜の神迎神事から始まり、一七日の神等去出神事で終わる。

佐太神社では、その後の十一月二〇日から「佐太の神集い」と呼ばれる「神在祭」が神迎神事から始まり、二五日行われる神等去出神事とそれに続く宿借神事で終わる。佐太社では春にも十一月の神在祭の裏月祭が、五月二〇日から二五日まで挙行される。平安時代末期に佐太神社が始まったとされる神在祭は、鎌倉期以降出雲大社の方が全国的に有名になった。しかし佐太社では、古とほぼ同じ神事が続けてきており、あくまでも出雲大社に張り合ってきた姿勢が読み取れる。

出雲大社には多くの参拝客であふれていたが、佐太神社には我々だけであった。しかし三層の本殿を持つ境内は、過つて大社と争い、秋鹿、島根、楯縫、意宇西半の三郡半を守り切つたその底力を、感じさせるものであった。(この項おわり)

参考文献

村田正志考注『出雲国造家文書』
西岡和彦『近世出雲大社の基礎的研究』

元駐韓大使の「嫌韓書？」 批判続報

文在寅大統領は変わったか

新井 宏

前回の『史遊サロン通信』に、書評とし

て元駐韓大使・武藤正敏氏の「嫌韓書？」『韓国人に生まれなくて良かった』について長々と書いた。武藤氏は韓国メディアからは、日本人全員が韓国を罵つても最後までこの国をかばう人物と見られていたのに何だと云う思いであった。

事実、文在寅政権誕生当初は、同じ題名

「韓国人に生まれなくて良かった」のコラムを書きながら、私と同様に、韓国の宿痾を鋭く指摘しても、礼節ある記述であった。

ところが、文在寅政権の推移を見て、突如として「嫌韓書？」と見紛うように

最悪の大統領

なぜいま文在寅なのか！

開いた口がふさがらない！

北朝鮮にすり寄り、反日を叫ぶ大統領に日本は強い決意で臨むしかない。

と主張したのである。

そこには、元駐韓大使としての品格が認められないだけでなく、「韓国に対して、こ

の程度の皮相的な理解しかできていなかったのか」という激しい「怒り」に似たものがあつた。時たまたま「米韓首脳会談」を目前にして、『史遊サロン通信』に余白も十分にあつた。そこで長々と書いたのが、武藤氏の認識とは百八十度異なり、「文在寅は変わる」との予想であつた。

自分としては、そうあつて欲しいとの願望もあつたが、「先の事」を書いて、全く見当違いになつたら気が重いと緊張していた。

親北傾向を強く持つ文在寅は、高高度防衛ミサイル(サード)の設置、米の自由貿易協定(FTA)再交渉、慰安婦問題日韓合意に誰よりも強く反対して、大統領選挙戦を勝ち抜いた。

しかし、大統領としては、韓国内に存在する不条理な「わがまま」をいつまでも放置しては何もできない。米韓首脳会談を機に、実利のために君子豹変するはずである。

旗振り役が豹変すれば、不条理な「わがまま」は萎んでしまうであろう。それが私の予想であり、急いで書き留めたのが前回の書評なのである。

さて、今回は「文在寅が予想通りに変わった」ことを続報として書く。

一言で言えば、首脳会談で「韓日米安保共助」が一気に進んだのである。「韓日米共助」は米国が暇さえあれば韓国に要求してきた核心イシューだった。しかし、韓国は保守政権さえ三国共助を敬遠していた。李明博大統領の時、米国が「南シナ海問題で韓日米共助」を要請したが、「中国を刺激しかねない」と受け容れなかった。朴槿恵政府も韓日米共助を公然と支持することは極力避けていた。

ところが誰よりも反日意識が強く、「韓日米が一つになれば朝中露がまとまり、新たな冷戦時代が開かれてしまう」と主張してきた当の文在寅が「観日米安保共助」をあつさり受け容れたのである。だからこれを韓国ではミステリーと云っている。

懸案となつていた「サード発射台」四基の追加配備は即刻実施すると約束した。その他にも、先制反撃戦略への同調、原子力潜水艦の所有要望、韓国ミサイルの弾頭重量の倍増要求、国防費の大幅増額など「右」政権と見紛う政策を提示している。

米韓自由貿易協定(FTA)の再交渉問題は、まるでマンガである。文在寅は野党時代の八年間、徹底して米韓自由貿易協定に反対し再交渉を要求していた。その状況の中で、米国が逆に貿易不均衡是正のため強烈な再交

渉を要求してきたのである。韓国内には戦慄が走っている。もちろん、文在寅は応じなければならぬ。

慰安婦日韓合意問題については、「再交渉」を強く掲げて選挙に勝ったが、今や政府としては触れたくない雰囲気、公式的には何の意思表示もない。あるのは韓国国内向けの迎合的な発言のみである。

状況を整理して云えば、文在寅の発言は、いまだ韓国国内向けは「左」に迎合的な発言で満ちているが、外交面では現実的に修正されつつある。文在寅は「北朝鮮問題では、周辺国に頼らず、我々が運転席に座って主導していく」と「均衡者外交」に強気であった。しかし、今は米中日露が当事者である韓国を除外して交渉している現実に慌てている。これを見て、韓国マスコミは「コリアパッシング」だと騒いでいる。「均衡者外交」を主張する韓国に対して、「コリアパッシング」は面当てのように見える。

さて、韓国が外交面で度量の大きな譲歩をするのは、意外と「左」の政府の時が多い。韓国内の「左」の不条理な「わがまま」を抑えることのできるのは「左」の政権だけだからである。したがって、武藤正敏氏が心配す

るよりも、「最悪の文在寅」が成果を挙げるのではないかと思つて居る。

そこにニュースが入つて来た。日本の植民地支配下で朝鮮半島から動員された徴用工の請求権問題について、文在寅大統領は安倍晋三首相との八月二十五日の電話で「徴用工問題については国家間では解決済みとするこれまでの韓国政府と同じ立場だ」と述べた。

文在寅は、弁護士時代に「徴用工裁判」を手がけ、つい先日まで、「徴用工個人の請求権は今も効力がある」と述べていた。この豹変が可能なのは、彼が「左」に対して大きな影響力を持つているからなのである。

もちろん、文在寅が変わつたのは外面だけで、その思想が簡単になつた訳ではない。

二年近く前に、史遊会で「地政学・ポーランドと韓国」と題して講演を行った。それは韓国における近年の「均衡者外交志向」に強い危機感を持つていたからである。

「地政学的な状況」が良く似ていた第一次世界大戦後のポーランドでは、ソ連に付いたりナチスに付いたり、両国を手玉にとるつもりで「均衡者外交」を進めていたが、それは「恐るべき幻想」であつた。一九三九年、ポ

ーランドは、瞬く間に再び両国により分割されてしまった。

朴槿恵が天安門で習近平と腕を組み中国に接近したが、結局、米国のサードの韓国内設置を認めざるを得なくなり、習近平は面子を潰された、大々的な報復にでている。中国人の観光客は激減し、現代自動車の中国工場は今や操業中止の危機を迎えている。

文在寅もサード設置を大幅に遅らせるとして、一旦は中国に気を遣っていたが、今や反対運動を抑え、今月初にも設置させる状況である。遅まきながら、文在寅は米国について行くしかないと割り切つた。

あまりにも急成長を遂げた韓国は、極端な「先進国部分」とそれに付いて行けなかつた「後進国部分」で二極化されている。

先進国部分は「大企業癒着」の「保守」であり、それに対して「反癒着」とでも云うべき「反保守」の後進国部分「非合理的わがまま」がある。

このような、「先進国」と「後進国」の同居と、地政学的な背景の中では「慰安婦」などは本来問題には成り得ないはずである。それなのになぜいつも主題とされているのであるか。それは「右」を揺さぶるのに「左」が利用する最も効率的な手段だからである。